西田幾多郎「伝統主義に就て」を読む
——戦前のＴ・Ｓ・エリオット理解を背景として——

中井　晨

1．歴史的実在の世界

多くの歴史哲学は満足を与えてくれない，と西田幾多郎は記す。1936年5月のことである。

> それ等の人のいふ歴史的世界とは，自己といふものがその中に居る世界ではないと思ふのです。自己といふものが何処までも外に居て，唯，芝居か何かを見る様に，眼だけで見て居る世界にすぎないと思ふのです[1]。

時間を意識したとき，その時間の流れを辿りたいという願いとともに，時間の因果関係を歴史として見出そうとする試みがはじまったのだろう。主観を越えるとされる客観的な方法，とりわけ科学的な方法を強固な武器として，自然の法則や因果関係についての理解が深まるとともに，歴史はますます自然科学に似た合理性や客観性を帯びるようになったと考えられる。Ｔ・Ｓ・エリオットが「ゲロンチョン」の草稿に手を入れた[2]ように，自己との関わりを失った歴史の背後に，迷路としての自然があるのだ。

西田は，このようにして歴史から疎外されるに至った自己あるいは人格[3]を恢復することによって，歴史的世界に生命を与えようとした。同年，1936年10月，『善の研究』改版にあたっての彼のことばを借りれば，「歴史的実在の世界」の解明である。彼は，この書の「純粋経験」の立場は“意識の立場であり，心理主義的とも考へられる”が，「場所」（1926年），「弁証法的一

般者」の世界（1934年），そして「行為的直観」の立場（1935年）を経過したあとでは，かつて“直接経験の世界とか純粋経験の世界とか云つたものは，今は歴史的実在の世界と考へる様になつた”[4]のである。

エリオットが博士審査論文で扱った認識論は，直接経験／純粋経験の立場から出発していた。西田とエリオットの伝統論の背後にある直接経験の立場，また，両者のジョサイア・ロイスなどとの近親性は，すでに指摘されている。また，比較文学あるいは比較文化の観点から，エリオットの伝統論と西田哲学との関係も論じられている[5]。本稿が最終的に目指すのは，より狭く，西田が「歴史的実在の世界」を構築する過程でエリオットの伝統論がどのように解釈され組み込まれたか，その一側面の検討である。西田の発言の日付に本稿が拘るのは，1934年11月の講演「伝統主義に就て」を挟む，その準備と講演記録の確認の期間が，西田の思索が歴史的実在の世界へと深められつつあった時期と重なるからである。

日本英文学会第6回大会が1934年（昭和9年）11月23日から3日間に渡って京都帝国大学で開催された。最終日，25日午後2時より特別講演にうつり，“始めに京大名誉教授西田幾多郎博士の「伝統主義に就て」と題する約二時間に及ぶ講演が満場立錐の余地なき盛況裡に行はれた。”[6]石田憲次の1966年の回想によれば，エリオットの「伝統と個人の才能」に共鳴していた西田が“そのことを独自の立場から述べ”たものであり，“英文学の学徒であるその日の一般聴衆（その中には私も含めて）にはわかりにくい講演であったが，哲学科の新鋭学者は特に出席して熱心に聴講”[7]した。

西田は講演の冒頭に言う。“英文学には全くの素人であります。ただ石田君からT. S. Eliotの評論だの詩だのの事に就て伺つてゐますと，その考へが何となく私が，現に考へてゐる哲学上の立場と結びつく様に思ふので，さういふ事をお話して見たいと思ふのであります”[8]と。講演は，「世界」の構造から「歴史的世界」の構造へ移り，論題にあるように伝統論に絞られてゆく。“わかりにくい講演であった”という記憶と響きあって，石田の言う西田の

その“独自の立場”とは曖昧だが，現在，講演を反芻しながら読むことができる読者にとっても難解である。しかし，西田によって読み込まれたエリオットのテクストは，注目すべき独自性あるいは新鮮さを与えられているのである。

ただし，その西田の伝統論解釈の特異性は，彼が「形而上詩人たち」を「伝統と個人の才能」と合わせ読み，“歴史の感覚”をあくまでも“知覚”として理解したこと，また，そのことが，伝統解釈の決定的な鍵となった[9]ところにある。本稿は，まず，わたしたちが読む対象とする講演テクストを確認し，ついで，副題にあるように，それを西田哲学とエリオット研究という時代背景としてのコンテクストに置いて考える。これをもとに，「形而上詩人たち」が読まれた当時の視点が具体的な例によって辿られる。西田の“歴史の感覚”解釈の驚くべき新しさ，および，伝統論解釈については，さまざまな角度から切り口を用意することにとどめ，それぞれ，あらためて別稿で検討される。

2．テクストについて

1934年11月25日，西田幾多郎は原稿を用意せず[10]，いつものように演壇を歩きながら語った。あらかじめ，わたしたちが読む対象とするテクストの種類を確認しておかねばならない。

講演を読むということは，講演を聴くことと異なる。講演は，語りの抑揚，身振り，部屋，音響効果，周辺の聴衆の反応，さらに，わたしの関心，理解度，さらには体調など，これらを総体とする一回かぎりの原テクストである。講演の記録は，読むほかない。ところが，その記録されたことばは，速記による場合でも，記録者の耳に届きにくかったり聞き誤ったりすることはありうるし，さらに，その原稿化，さらには活字化，校正の過程での異同はありうることである。また，記録にのちに講演者自身が手を入れるとすれば，新しいテクストが生まれる。テクストの問題は，講演「伝統主義に就て」の場

合，具体的な，かつ，やっかいな問題を孕むことになる。

石田の推測によれば，“哲学科の新鋭学者”の“恐らくその誰かの筆記を基とした講演要旨が朝日新聞紙上に現れ”た。石田の言う“講演要旨”すなわち「要領筆記」は「伝統主義について」と題され，1934年12月4日から3日間に渡って，『大阪朝日新聞』の文芸欄に掲載された。その末尾に，「文責在記者」と記されている。ただし，これは，西田も石田も与り知らぬところであった。一方，石田の記憶では，“日本英文学会でも速記か何かに先生の御加筆を請うて”翌年5月，その原稿が『英文学研究』に掲載されることになった。『全集』に収められた「伝統主義に就て」は，その誤植などについて校訂を受けたものである。これが標準テクストとされている。

講演の「要領筆記」が新聞に掲載された直後，12月11日，西田の石田宛はがきによれば，高坂正顕の手による筆記原稿はできていた。

> 私はつい気づかずにゐましたが朝日新聞に私の話がのりました由　実は大分前に朝日の人が来て今度話す原稿をくれと申しましたが私は原稿をつくらず聞いたものを書くのなら石田君に許可を得る様にと言つて置きましたが貴兄に無断にてのせましたるものと見ゆ　高坂君の原稿はできましたがお急ぎもなき様の御話なりし故篤と閲読いたしその上加筆いたしたいとおもつてゐます[11]

この“加筆”作業は翌年に持ち越されたと推測される。1935年1月7日，ふたたび石田宛。

> すみませぬが尚一度先日お貸し下さいましたEliot, Poemと英文学講座とを一覧したいと思ひますがお手数恐れ入りますが御貸し下さいますまいか　例の原稿を直したいとおもひますから

西田の責任において完成されたテクスト「伝統主義に就て」は，ここに西田自身が明記し，また，『全集』に収録するにあたって下村寅太郎が記すように，「文責在記者」すなわち“高坂正顕氏筆記整理されたものに，先生自らが追記された”もの[12]，この二つの部分から成り立っている。

本稿では，前者を「講演記録」とし，後者，書き下ろし部分を「追記」と呼ぶ。筆記原稿を西田が“篤と閲読”した上で加筆あるいは“直し”を加えたものが「講演記録」であり，それを確認し，“永遠の現在の自己限定”など，講演にはなかったと想像される表現を一例に，講演の要約とともに，自らの哲学的立場との関連でエリオットを検証する思索をつづけ，関連する事項を強化したもの，それが「追記」部分である。

「伝統主義に就て」を読むにあたって，本稿では，高坂の原稿にもとづく「講演記録」を参照しつつ，西田の書き下ろしである「追記」を確認することとする。新聞掲載のテクスト「要領筆記」も必要に応じて参照される。このテクストは西田の与り知らぬものであり，しかも，それが講演の「要領」であるために，語られたテクストからの距離は大きいと想像しなければならない。したがって，これに過大な信頼を寄せることはできないが，「講演記録」と照合することによって，後者との異同が確認でき，互いに欠落する事項が明らかになる場合もある。後者の異同は，原稿への加筆や直しによって生じている場合もありうるのだ。両者の照合によって，語られた「原テクスト」の一端を読むことができるであろう[13]。

講演は，エリオットを理解するために“世界と云ふものが，どう云ふものか，どう云ふ構造を有するかといふ事から”(371) はじまり，その世界の歴史性へと展開してゆく。この部分は，西田哲学の立場を敷衍したものであり，講演の約三分の二を占めている。待望の伝統論の解釈は，この西田哲学を背景にして語られるのだが，エリオットの見解を知る読者にとっては，思いもかけぬテクストの読みと明らかな誤読とが混在しているために，西田の断片的なしかも重要な言及が，実に難解なのである。さらに，その伝統論解釈

の背景に，前段にはなかった“文化形態”[14]についての思索が働いている。このように，エリオット解釈は西田の思索に織り込まれており，腑分けが非常に困難なのである。また，約3頁からなる「追記」は「講演記録」の確認ではあるが，困難の度合はさほど変わらない。しかも，石田からあらためて借用した書物によっても推測できるように，西田の関心はすでに『荒地』[15]に移っており，それが三分の一近くを占めることになる。

「伝統主義に就て」を，エリオットの読者はどう読むべきか。試しに，「講演記録」の“伝統と云ふものはどう考へたらよいか”(378)にはじまる部分を通読していただきたい。句点で結ばれた見解は，つづく見解へ受け継がれ，さらに新たな見解へと展開される。この思索の流れは，読者に耐えられないほどの緊張を強いる。しかも，その流れこそ西田の思索の痕跡なのだ。引用するとすれば，思索の流れを生かすために，長くならざるをえない。短く切れば，思索を分断することになる。また，安易な要約には，思わぬ陥穽[16]が待ち受けている。このことは「追記」についても言えるであろう。わたしたちのテクスト，「伝統主義に就て」を読む方法があるとすれば，まず，個々の断片的な言及の検討からはじめることである。当然，問題は生ずるが，この作業なくして西田の伝統論解釈を再構成することは難しいのだ。

1934年，2・3月の「現実の世界の論理構造」，ついで「弁証法的一般者としての世界」を7・8月の『哲学研究』に掲載し終わった頃，8月13日，西田は石田に宛てて記す。“Eliotのものをよんでみました　大体その要点は分つた様におもひます”[17]と。9月，西田は書き下ろした「形而上学的立場から見た東西古代の文化形態」とともに，これら論文を収めた10月の『哲学の根本問題続編』の刊行に備えて校正作業[18]にかかっていた。その間，彼は晩秋の日本英文学会の講演に備える。

学会はあくまでも思索の場であった。ただし，あらためて，この1934年11月を，その時代の思想的潮流あるいは論壇との関係に置いてみるならば，西田の哲学はもちろん，彼のエリオット理解の背景が浮かびあがるだろう。そ

して，冒頭に見たように，一般の歴史哲学への不満を記し，『善の研究』の改版にあたって自らの思索の跡をたどった1936年が，2・26事件の年であったことも記憶しておいていい。講演テクスト「伝統主義に就て」が論壇のコンテクストにおいて読まれるべき所以である。

3．論壇のコンテクスト

エリオットの歴史の感覚と伝統に関する戦前のエリオット理解の軌跡[19]は，大まかに言えば，唯物論的歴史観をとる立場と，他方，排外的な日本文化の伝統擁護の立場を背景にしていた。エリオット理解は，当時の論壇の動向と直接的また間接的に関係していたのである。

同じような論壇の状況は，1934年11月25日の講演「伝統主義に就て」に先立つ西田幾多郎の哲学的思索の背景をなしていた。「夜ふけまで又マルクスを論じたりマルクスゆゑにいねがてにする」[20]と1929年に詠んだ西田は，さらに，1932年11月，政局の混乱を見て，“我国の皇室といふものが　反動的な思想勢力と結びつくといふ事はこの上なき危機の事”であり，また“文部省の精神文化といふもの　あれはとてもだめだ”[21]と書簡に記すことになる。彼の「知識の客観性」は，このような“今日は非常時だと云はれる”[22]危機感から書かれたのである。これは，1933年2月に執筆され，哲学関係誌ではなく総合雑誌『改造』の4月号に掲載された。のちに，1937年4月の『続思索と体験』に収録されることになる。執筆の1933年2月，それは国際連盟を脱退する方針を閣議が決定した月であり，単行本の出版は，1937年7月の「日華事変」へ急速に傾斜してゆく時期にあたる。

わたしたちの講演「伝統主義に就て」の場合を見よう。1934年12月6日，「—叡知的活動性—西田哲学とエリオットの思想」を副題として，「要領筆記」の「伝統主義について(3)」を載せた『大阪朝日新聞』の「文芸」欄[23]と同紙面の「ラヂオ」欄は，その夕刻に大阪中央公会堂で行われる「国防婦人会二周年記念」講演会の中継を予告している。講演者の海軍少将近藤信竹

は“近代では国策遂行は国家総動員によらざれば目的を達し得ない”ことを英国の実例にとって説明し，また，陸軍大臣荒木貞夫は“国民挙国一致非常時を切り抜けて行くため”の日本婦人の役割を論ずるはずであった。エリオットの「叡知的活動性」と「国防婦人会二周年記念」講演会は，昭和期のエリオット理解の高揚期と背後の状況との際だった対照を見せている。

わが国の政治的非常時にあっては，思想的には，唯物論的歴史観の排除と，西欧近代の超克，すなわち，日本精神の称揚を意味する。1933年の滝川事件，35年の美濃部達吉の天皇機関説への攻撃の例を思い起こせば，論壇をとりまく状況の推移を窺うに充分であろう。エリオット理解について言えば，キリスト教的立場を明らかにしたエリオットを検証する荒川龍彦は，『英語青年』1933年6月1日の「T. S. Eliotとその批評的立場（最近のEliot批評をめぐつて)」において，エリオットの変貌は“転向”ではなく“発展”として見るべきだと主張[24]する。同月10日の佐野・鍋山の「転向声明」の直前のことである。英文学研究のことばが論壇の語彙を共有するひとつの例である。状況は英語英文学の研究と無縁ではありえなくなっていた。そして，西田が講演記録に加筆と追加の作業をはじめる頃，1935年1月1日号の『英語青年』は，新しく「世界展望」欄を設けた。編集者は“本号から，わが国有数の外交批評家，向日堂主人に御願ひして日英米を中心とする世界の情勢を一頁づゝ解説して頂くことに”[25]したのである。わずか一年半の間に，“転向”によって一応の唯物論的歴史観を排除したのち，「世界展望」が歯止めを掛けねばならぬほど，わが国の論壇が排外主義への傾斜を急速に深めて行く過程を見ることができる。

西田の講演「伝統主義に就て」が行われた1934年の英文学研究の動向はどのようなものであったか。『英語青年』同上号の「英学雑記」で福原麟太郎は“去年の英学壇の総収”として，“英学会で論争の中心になつた”そのひとつが，“本誌上に於ける工藤好美氏が，西脇，土居，荒川三氏の述作を中心として，文学と実践を論じたこと”[26]である。工藤は「三つの文学論」で，

荒川の『T・S・エリオット』に触発されて，激しくしかも良質のエリオット批判を展開した。そして，「文学と実践」の統一の立場からなされたエリオット批判は，活字にされた文献によるかぎり，戦前のエリオット理解においては，この，工藤の「T. S. Eliot 論（上・下）」[27]がおそらく最後であった。他方，注目すべきは，“私の文学論をプロレタリア文学論に接近してお考へ下さつた”工藤に応える，1934年7月1日の，土居光知「工藤氏の批評をよみて」である。

> 新しいvisionsを持つ論者は新しいイデオロギイの上に過去の文学の伝統を止揚して，新興文学の創造に資せんとしてゐるのでありますが，私は（中略）三千年間つゞいた伝統の総勘定を虚心をもつてなすことにつとめたいと思ひます[28]。

土居は新興文学の創造を認める。しかし，その創造のために止揚されるべき“過去の文学の伝統”がいかなるものであるか，それを明確にせねばならぬ，と彼は考えるのである。もちろん，“過去に逃れることはでき”ない。だが，土居は“流行してきた国粋主義の流れにのつて国学者が源氏や俳諧をもちあげてゐることにも心からの共鳴を持つことが”できないのである。彼は“新しい時代が継承し，発展せしめ得るものを持ちだして闡明することが国学者の任務であり，そのためには日本文学の持続せる伝統の正当な認識が基礎になるべきであらうと思”うのである。[29]

土居の「工藤氏の批評をよみて」は，唯物論的世界観にかわって排外主義が論壇を支配しはじめる論壇の状況の記録でもある。エリオットは歴史の感覚の必要性を説き，かつ，ヨーロッパの伝統を主張する。それをわが国の問題と関連づけようとするとき，その歴史の感覚が未来の新しい社会を拓く歴史的意識であるか否かが検証される。そして，排外主義の高まりのなかでは，エリオットの主張する伝統は，排除されるか，排外主義の論拠とされるか，

論理的にはそのいずれかに向かうことが推測される。ただし，戦前のエリオット理解は基本的には研究者と教室にほぼ限定されていた，ということを見逃してはならない。活字にされたものを眺めるかぎり，排外主義のイデオローグがエリオットを利用したという事実[30]はあるが，エリオットを理解しようとする努力はほぼ健全に営まれたと言うことができるであろう。もちろん，エリオットを読み解く作業が困難であったということも忘れてはならない。

文学者土居が研究を進める背景にあった論壇の状況は，哲学者西田にもまた意識されていた。土居よりはやく，1933年2月，「知識の客観性」の冒頭に西田は記す。“近年の思想界に於て著しく目に立つのは，知識の客観性といふものが重んぜられなくなつたことであると思ふ”[31]と。

すでにこの頃一層の難解さを示しはじめた西田の哲学論文の語り口とはまったく対照的に，「知識の客観性」の論旨と文体はきわめて明快である。“政治上の目的の為に学問が作られるのでなく，学問はいつでも批評的指導的立場に立つもの”でなければならない。もちろん，学問は“実生活を離れて存在すべきもの”ではなく，“学問の歴史性を否定する”ことはできず，“如何に客観的といふことを理想とすると云つても，その時代の社会的影響を脱することはできない”であろう。しかし，

> 苟も学問に従事し学問によつて人生に貢献しようとするものは，何処までも真理を理想として深大なる人生の建設に努力せなければならない。真の政治といふものの目的も，かゝるものの建設にあるのでなければならぬ。(157)

思想としての史的唯物論，さらに，それを政治に実現しようとする立場に，西田は言及する。すなわち，唯物論を主張する際にその根底としてある弁証法，そして導かれる実践（プラクシス）が哲学的な検証に耐えられるか否

か，すなわちその知識が果たして客観性を持つか否かを冷静に見極めなければならない(157-8)，と。この頃の西田が思索を深めようとしていた「歴史的実在の世界」こそ，歴史的唯物論を越える立場であったことは言うまでもない。

ただし，論壇には新たな勢力が台頭していた。知識の客観性は排外主義者にも求められるべきものとなる。このとき，西田の論調は，土居と重なってくる。

> 唯物論を主張する人々に自己批評を欠くと考へられると共に，偏狭な排外主義を唱へる人々にも同様の弊があると思ふ。我々は幾千年来我々を孚み来つた文化精神を，その広い深い根底から研究し，闡明せなければならない。政治家の一時の目的に合ふ様な特徴のみを誇張すべきではない。(小略)単なる独断的信念は学問上何事をも成し得ない。且つ単に過去が斯くあつたと云ふことから，現在未来が如何にあるべきかといふことは出て来ない。(158-9)

未来に新しい地平を拓こうとする歴史意識は，過去を止揚するという論理を持つ。しかしながら，未来志向の性急さは，現実には，過去を糾弾し，ついにはこれを捨てることになろう。土居の言う“三千年間つゞいた伝統の総勘定”や，西田の言う“幾千年来我々を孚み来つた文化精神”を闡明にする研究は，蔑ろにされるであろう。伝統や文化精神は脅威に晒されるのだ。他方，これらを尊重すべきだという立場は，知識の客観性によって検証されぬまま，かつ，世界的思潮を視野に入れることなく，ひたすら日本的なるものを継承することになれば，過去は未来を拓くことはできない。つまり“単に過去が斯くあつたと云ふことから，現在未来が如何にあるべきかといふことは出て来ない”のである。排外主義の罠はここにある。

「知識の客観性」の結びの節は，このようにはじまる。

私が現代の日本の立場といふのは，過去の歴史を軽視すると云ふのではない。過去といふものなくして現在といふもののないことは云ふまでもない。併し又現在及び未来といふものなくして，過去といふものもない。過去は永遠に生きた過去でなければならない。真の過去は永遠の現在の意味を有つたものでなければならない。我々は我々の文化の内に，過去を構成し未来に発展する永遠に生きたものを見出さなければならない。それには，我々は何物にも捉はれることなく，十分に批評的であり，十分に研究的でなければならない。(163)

「我々の文化の内に，過去を構成し未来に発展する永遠に生きたものを見出す」——エリオットを知る読者はもちろん，土居であれば，当然のように，これを「伝統」と呼ぶであろう。しかしながら，この1933年2月，西田はまだ「伝統」の役割を配慮していない。まもなく“永遠の現在の意味を有つた”そういう“真の過去”は，エリオットの言う「伝統」として，彼の「歴史的実在の世界」の思索と結ばれるであろう。

エリオットとの出会いから講演「伝統主義に就て」が生まれた。以降，西田の書き物にエリオットへの言及が散見されるようになる。そして，彼の評論「伝統」[32]が登場するのは，戦争さなか，1943年9月のことである。9月30日，御前会議は「絶対国防圏」構想を決定する。総力戦の結末は予測されていたのだ。

西田がエリオットに本格的に関心を寄せはじめるのは，書簡によるかぎりでは，奇しくも，「知識の客観性」を書いた同じ月，1933年2月の“深瀬君の書れたEliot文学論といふもの如何なるものにや　深瀬君の方に若し岩波から送つた別刷の余分があつたら一冊もらへないでせうか”[33]にはじまる。正確に言えば，深瀬基寛の書いたものは，エリオットの文芸批評を扱った『現代文学の諸傾向　評論』であった。ここにはエリオットの伝統論の立場が明

快に要約されていた。ただし，西田の伝統論解釈は「形而上詩人たち」の読みを抜きにしてはありえなかった。しかも，深瀬はこの評論についてはまだ論じていなかったのである。

4.「形而上詩人たち」の読みかた

1933年1月，深瀬基寛の『現代文学の諸傾向　評論』は岩波講座世界文学第二回配本の一冊として刊行された。遅れて，新英米文学社の「英語英文学講座」の刊行が同年5月からはじまる。その広告文に言う“現在の非常時”[34]のなかにありながら，この1933年は英語英文学研究の高揚期を迎えることになった。同年10月1日号の『英語青年』はその付録に，研究社の英米文学評伝叢書全百巻別冊三巻の刊行を予告し，予約募集をする。この年は，同時に，戦前のエリオット研究の最も大きな収穫の年でもあった。のちに言及する単行本の他に，深瀬のものと同時に配本された岩波世界文学講座の，佐藤清『エリオット』は評論を導入部とし『荒地』を重点的に論じていた[35]。英語英文学講座からは，8月に井上思外雄『ティー・エス・エリオットの「荒地」』が出版される。

ただし，1933年1月の深瀬も，佐藤も，またのちの井上も，西田のエリオット理解にとって決定的な働きをする評論，「形而上詩人たち」に触れていない。しかも，西田がエリオットを読みはじめた頃，実は，この評論をいかに読むかが，新しい関心の的になりつつあったのである。

この評論は，書評として『タイムズ文芸付録』に発表された。1920年の『神聖な森』が出版されたあとであり，『荒地』の発表に1年先立つ，1921年10月のことである。1924年，小冊子の『ジョン・ドライデン讃』[36]に収録されたが，『神聖な森』の背後に隠れた感があった。このような経緯もあって，英語文化圏の研究者のあいだでもその重要性が注目されるのは遅かった。1929年，ジョージ・ウィリアムソンが『T・S・エリオットの才能』で，エリオットの詩を理解するために，とりわけダンとの関連で，これを重要な

評論として位置づけた[37]のがその発端と見るのが妥当であろう。1931年の北村常夫訳「形而上学的詩人達」の出現は，この流れに沿ったものと考えていい。つづいて，1932年9月に出版された『批評選集 1917-1932年』がこれを収録したので，これを原文で容易に読むことができるようになった。出版されたばかりのこの選集を配慮した北村は，わが国最初の評論翻訳集『エリオット文学論』を刊行するにあたって，1933年8月，先の翻訳を「形而上学的詩人」と改題[38]して収めた。

他方，これから例を見るように，土居光知と荒川龍彦，そして，福原麟太郎もまた，この新しい文献と格闘し，あるいは配慮しつつあった。

土居は1933年12月に，岩波世界文学講座の一冊に『文学形態論』を発表した。のちに，工藤好美の書評の対象となった一冊[39]である。その「現代詩歌の形態に関する一考察」が，「形而上詩人たち」を議論の核としていた。「工藤氏の批評をよみて」を書いた翌年，1935年9月，土居は『英文学の感覚』を刊行する。「はしがき」に記すように，これは，折りにふれて書いたものから“捨てたくないものを選択”したものである。“思想的な論文は興味の焦点が推移した今日，そのまゝでは再び版にしたくないものとなった。こゝに選んだものは，私の英文学研究に於ける道草であり，主として思想になる以前のもの，即ち英国文学者の感覚，趣味等に関してゐる”[40]と。彼は，関心が「思想」からそれ以前の「感覚」へ推移したことを宣言する。それでもなお，『文学形態論』からは，一点，改題されて，「現代詩歌の一つの形態」が採用された。

1933年12月のこの評論で，土居はいくつかの詩の表現を検討し，“矛盾するものが情熱によつて融かされ，理智によつて調和されることもなく，矛盾のまゝにそのまゝ表現されてゐる”(325)ような詩の検討に移る。このような

対立，背反，相克の表現法を何と名付けたならよいであらうか。今日の流行語では弁証法とでも云ふべきであらうが英国では在来 Metaphysical

poetry の名を与へられてゐた。形而上詩なるものを始めて定義したのはジョンソン博士である。(327)

形而上詩は wit (機智)から成り立っている，とジョンソンは言う。ただし，“機智とは矛盾の統一 (discordia concors) 或は表面的には非常にかけ離れてゐるもの、うちに隠れた一致点を見付けることであるが”ジョンソンはこれに理解と同情を示さなかった。しかしながら，この形而上詩は現代の詩人によつて関心をもたれ “更に発展せしめられた”(328-9)のである。ハーバート・リードは

『思想の情緒的な把握』(the emotional apprehension of thought) と定義し，エリオットは『思想の直接な感覚的な把握，或は思想を感情に変生せしめること』(a direct sensuous apprehension of thought, or a recreation of thought into feeling) と説明し，思想を直接にばらの香の如く感ずること (to feel their thought as immediately as the ordour of a rose) と言つてゐる。

ジョンソンの定義はテーゼとアンチテーゼが詩的に対立することを言つたのであらうし，リイドとエリオットとはその対立の相克から新らしい詩的綜合が生れることを暗示する語と解することができよう。(329)

そして，土居は「不滅のさゝやき」と『荒廃の国』の「屍を埋む」を訳出し，それらに，“対立と矛盾とを示して読者の心に衝撃を与へ，新らしい詩的綜合を生み出させようとする” そのような “弁証法的な表現法を更に一歩すゝめた”(334) 詩を検討するのである。

わが国におけるエリオット理解における土居の「現代詩歌の一つの形態」の重要性は，ここに含まれた翻訳が活字となったものとしてはおそらく最初のものであったばかりか，「屍を埋む」については，その表現法がジャズの音楽や映画の手法に近いこと，そのために “この詩を読み味はふためには，

かなりの速度を以つて心象を送り迎へることが必要であつて，沈思黙考しその論理的展開のあとをたどらうとしても不可能である”(351) と，“思想の速度”(361)を指摘したことにある。このとき，その速度の変容は “現代生活に於けるリズム感覚の変化が一大原因”(344) とされるのだ。

この “思想になる以前の感覚” の見事な指摘[41]は，“プロレタリア文学論に接近”する土居の形而上詩の弁証法的解釈を相殺しうるものである。しかしながら，1933年にあっては，その感覚はなおも弁証法と結ばれていたのである。

> 西欧に於ける現今の詩的表現は時代の急迫したリズムに順応し，急速に展開される対照的な思想の衝撃により弁証法的に内容を創り出さんとするものである。かゝる表現のみが，ロマンチックな，またクラッシカルな表現法が人生を力強く批判する力を失つた時代に於いて，時代のリズム感を満足せしめると同時に人生の批評をなすことができる。たゞ現代の詩歌は時代の急迫したリズム，分裂した思想をそのまゝに詩の形態に表はさんとするのみであつて，読者に光明と新らしい調和への道を暗示するものではない。(362)

この一節について工藤に言わせるならば，土居には“光明と新らしい調和への道”を拓くべき，実践への配慮が欠けていると指摘するであろう。その意味では，土居の弁証法は“今日の流行語”を借用したにすぎぬ，とも。わたしたちは，土居の言う “テーゼとアンチテーゼ” の関係にある “分裂した思想” の対立構造は，むしろ “感覚” の関係を同時に指していたと考えることができる。だが，土居は弁証法を配慮するあまりに,，エリオットの言う形而上詩人たちの “感性／感受性” が “思想” と “感覚” とが合体したものであることを見抜けなかったのである。テーゼとアンチテーゼの関係は，通常の弁証法では，同一の地平における異なったものの対立関係を意味する

だろう。彼の言うこの対立は，“機智” すなわち “矛盾の統一 (discordia concors)”[42] によって詩に実現されるであろう。だが，その “思想” と “感覚”は，それぞれ，異なる地平にあるものなのだ。西田の語り口を借りるならば，両者はむしろ「非連続の連続」の関係にあるのだ。

土居にひと月先だち，1933年11月に出版されたわが国で最初の研究書『T・S・エリオット』で，荒川龍彦は「形而上詩人たち」への配慮は怠らない。エリオットは“ジョン・ダンに寓して，感性と思想の渾然とした統一，その統一の経験を詩人の精神として指摘し，恋愛とスピノーザ，タイプライタアの噪音と料理の匂ひの別々にされた経験を融合し，有機的統一体を作ることが芸術のイデーであるといふ意味を述べてゐる”[43]と。荒川の基本的な関心はロゴスとパトスの弁証法的統一にあった。

荒川は，「詩の感性と思考」と題する章で，あらためてこの評論に触れて，“「詩(ポエジイ)」は既に哲学や信念をもたない以前にそれをもつてゐる”と確認し，つぎのように締めくくる。

> いはゆるパトス的な存在とロゴス的な存在の「生」における弁証法的統一が「詩(ポエジイ)」のモラルの根拠であらねばならない。「詩(ポエジイ)」の感性と思考はかくてひとつの統一体をなすものである。エリオットは恒にその統一体を吾々が「詩(ポエジイ)」に対して向ふとき，或はそれを実践する場合にあたつて正しく指示し，それをひとつの正しい趣味として享け入れることを教へたところの唯一なる詩人であり，批評家であつた。(299)

後段に，何らかの決意を語ろうとしながら文体が空転するのは，荒川が詩における弁証法的統一を「生」における「実践」[44]にまで止揚せねばならぬと思いつつ，同時に，「詩」の “イデー” あるいは芸術の “モラル” の自律性を確保しなければならぬ，という，いわゆる“純粋詩”への思いに引き裂かれているからである。実践とポエジーは相容れないままなのだ。統一を

実現する歴史への責任，すなわち，歴史的意識と，自らが否定しようとして捨て切れぬ，いわゆる主知主義とのディレンマはますます深刻となる。この矛盾はふたたび弁証法的止揚を必要とするだろうが，それは一回りして主知主義に立ち返るほかないだろう。

「英文学新講」を『英語青年』に連載中の福原麟太郎も，年を明けて，1934年2月から3月にかけて，「形而上詩人たち」を検討した。その冒頭である。

> 私のやうに人道主義の文学の盛期に育つて，情愛の文学，人間愛とか純情とかいふものを酒のやうに喜び，文学が理智的であることをsophisticationとして文学の正道を外れてゐる如く思ひ，陶然たる情緒の世界を楽んで来たものに取つて，Metaphysical Poetryは甚だ近づき難いものであつた。何故Metaphysical Poetryが好いか，といふことは，詩歌に対する我々の要求を改めない以上，即ち我々の文学に対する態度が変り，評価の標準が変らない以上，なかなか理解し難いと思ふ。[45]

福原は土居と同じようにジョンソンの議論からはじめ，その視野からエリオットを読む。ただし，ジョンソンの "Wit = *discordia concors*" は弁証法的解釈を与えられることはなく，また，エリオットの発言は，詩の実践をめぐる「詩（ポエジイ）」の理念に応用されることもない。福原は，17世紀の詩の形式を18世紀のジョンソンの見解から検証し，その対比において，エリオットの知的な"文学に対する態度"と"評価の標準"を照射しようとするのである。彼はまた，土居のように，形而上詩に対するジョンソンの否定的な見解がエリオットたちによって"更に発展せしめられた"もの，とも言わない。福原は，エリオットの見解に，"Metaphysical Poetryの今日に於けるre-valuationの意味"を探ろうとするだけなのだ。

結語はこうである。エリオットは"要するにJohnsonに反抗してMetaphysical Poetryの意義を認め，そのsensibilityが真正の詩人のものであると

し，殊にかゝる詩風が今日に適合するものたることを力説してゐるのである”[46]と。それだけである。この物足らなさこそ，新しい文学の方法に福原が違和感を抱いていたためばかりでなく，同時に，彼の守備領域を極力英文学にかぎることによって，わが国の論壇の状況と距離を置いていたことを意味するであろう。

「形而上詩人たち」をめぐる土居，荒川，そして，福原の三者の論考は，それぞれ論壇あるいは文壇との直接あるいは間接的な関わりあいを示している。だが，同じ評論を読みながら，1934年11月，西田はいずれの立場ともまったく異なった視点からエリオットに共鳴する。とりわけ，この一節である。しかも，これは土居と荒川の議論を支えていたものであり，また，福原が指摘するように，英文学におけるエリオットの新しい立場でもあった。

> Tennyson and Browning are poets, and they think; but they do not feel their thought as immediately as the odour of a rose. A thought to Donne was an experience; it modified his sensibility.[47]

講演「伝統主義に就て」の西田のエリオット理解は，「形而上詩人たち」を抜きにしてはありえなかった。しかも，西田はこの一節を，「伝統と個人の才能」にエリオットが言う，“歴史の感覚”と結びつけるのである。西田の伝統論解釈の詳細を見るまえに，そもそも，この二つの評論を関係づける西田の新しい切り口について確認しておかねばならない。『大阪朝日新聞』が前書きに言うように，この講演が“文芸評論にも一つの指針を与へるもの”[48]かどうかはともかく，わが国のエリオット理解に関して言えば，西田はのちのエリオット研究を先取りしていたからである。

注

1 西田幾多郎「『理想』編輯者への手紙」『西田幾多郎全集』第13巻（岩波書店，

1965年)，138頁。執筆あるいは初出の年月は本文中に記載することを原則とする。岩波文庫に，上田閑照編による当用漢字および新かな使いに基づく新しいテクストがあるが，他の書き物と引用上の統一をはかるため，すべて1965-66年版『全集』を使用する。引用にあたっては，旧漢字を改めるに止める。

2 T. S. Eliot, *Inventions of the March Hare: Poems 1909-1917*, ed. Christopher Ricks (Faber, 1996), p. 350 and p. 351. Cf. Gregory S. Jay, *T. S. Eliot and the Poetics of Literary History* (Louisiana State UP, 1983), pp. 22-23, and James Longenbach, *Modernist Poetics of History: Pound, Eliot, and the Sense of the Past* (Princeton UP, 1987), pp.3-4.

3 次の一節を参照。「講演記録」の加筆準備が行われる頃，1935年1月7日から3日間に渡って行われた講演，「現実の世界の論理的構造」『全集』14，262頁より。

> 日本語に訳すといけないが人格といふ言葉は面白い言葉である。Person といふ此の言葉はもとどこから出たかといふと，ラテン語の Persona からであつて Persona とは舞台へ出て役者の被る面のことである。つまり芝居をやるときの役者の役割といふやうなことである。(略)我々の歴史の舞台に出て働く役者，それが人格である。さう考へた方が本当なのだと思ふ。

4 西田幾多郎「版を新にするに当つて」『善の研究』『全集』1，6-7頁。

5 輪島士郎「T．S．エリオットと西田幾多郎」『英語青年』121: 1（1975年4月），4-8，同「T．S．エリオットの解釈論—特にロイスとの関連において—(1)(2)」『英語青年』122: 8 (November 1, 1976), 356-358; 122: 9 (December 1, 1976), 410-412. 前者は改訂のうえ，同『T．S．エリオットの詩と真実』（高島出版，1988年）に収録されている。本稿は『大阪朝日新聞』の記録の所在など，輪島に多くを負っている。比較文学としては，池谷敏忠『比較文学論集—T．S．エリオットを中心に—』（晃学出版，1986年），比較文化として，小川正英『エリオットへの序章』（英潮社新社，1987年）がある。また，村田辰夫訳T・S・エリオット『F・H・ブラッドリーの哲学における認識と経験』（南雲堂，1986年）は，その「注」に，西田とエリオットの哲学上の共通性について多くの言及を含む。

6 「日本英文学会第六回大会記事」『英文学研究』15: 1（1935年1月），148.

7 石田憲次「西田先生と英文学」[付録]（1966年6月）『全集』18，2頁。なお，“ちょうど深瀬基寛氏の「英文学の課題」が出た頃で”は間違い。後注33参照。以降，石田の回想はすべてこれに基づき，注記しない。

8 西田幾多郎「伝統主義に就て」『全集』14，371頁。本稿ではこれを標準テクストとする。以降，必要に応じて本文中にページを挿入することとし，原則的には注記しない。

9 本稿は，拙稿「歴史の感覚をめぐって—戦前のT・S・エリオット理解の一側面—」『同志社法学』200号記念論集II（1987年11月）[ただし執筆は1988年8月]，155-276と関心の在処において共通する。ここで示した西田に関する要約的な評価

(228)を詳細に論じることが本稿の目的でもある。

10 聴講した安田章一郎の記憶では，メモの類もなかったのではないか，と。

11 西田幾多郎石田憲次宛「書簡集二　新補遺」『全集』19，457頁。つぎの引用は，457-458頁。

12 下村寅太郎「後記」『全集』14，424頁。

13 テクストを整理すれば，つぎのとおり。

「原テクスト」[西田幾多郎講演]

「伝統主義に就て」1934年11月25日（於日本英文学会第六会大会）

「要領筆記」[文責在記者]

「伝統主義について(1)—西田哲学とエリオットの評論」『大阪朝日新聞』(1934年12月4日)，14面

「伝統主義について(2)—西田哲学とエリオットの思想」『大阪朝日新聞』(1934年12月5日)，16面

「伝統主義について(3)—叡知的活動性—西田哲学とエリオットの思想」『大阪朝日新聞』(1934年12月6日)，14面

「講演記録」[文責在記者／高坂正顕：1934年12月11日以前に整理済み。西田加筆]

「伝統主義に就て」『英文学研究』15:2（1935年5月),[159]-170；『全集』14，371-383頁

「追記」[文責西田：上記の直しとともに，1935年1月7日以降執筆]

「伝統主義に就て」『英文学研究』，170-172；『全集』14，383-385頁

14 のちに示すように，西田は「形而上学的立場から見た東西古代の文化形態」を，講演に先立つ1934年9月初頭までには書き終えていた。

15 西田が石田に改めて一覧を希望した二冊は“Eliot, Poem と英文学講座”である。“Poem”に相当するものとしては，1920年版の *Poems* があるが，これはまず入手不可能であるから，*Poems 1909-1925* でなければならない。これには『荒地』が含まれている。西田は「追記」で『荒地』の注釈をこの原書で確認している。他方，“英文学講座”は，新英米文学社の「英語英文学講座」を指す。この一冊に，井上思外雄「ティー・エス・エリオットの『荒地』」(1933年8月）がある。西田がこれを読んだことは確かである。井上はリチャーズの「観念の音楽」を引き，『荒地』を“即ち，観念のシムフオニー”(31)と呼んでいるが，この記述を基に，西田は“Richards は「観念の音楽」といふが，それは世代のシムフオニーでなければならぬ，歴史に於ける現代の意義を示すものでなければならない”(385)と言う。これはたんなることばの置き換えではない。このことについては，別稿であらためて触れる。

16 たとえば，荒川龍彦「伝統性の承認」『現代英国の文学思想』(理想社，皇紀2600年[1940年]12月)，86-87頁参照。この要約には“歴史的世界”が脱落しており，

その結果“歴史的生命”が独り歩きし，皇紀2600年に相応しい議論となる。西田を援用したこの評論については，拙稿「歴史の感覚をめぐって」223以下に論じた。むろん的確な要約は解釈を含めながらも可能である。輪島士郎の要約，“西田論文の骨子”(230-234頁)を参照。

個々の断片的なエリオットへの言及の検討からはじめる，という方法らしきものを採る筆者は，哲学的な訓練を持たないが，それでも，中村雄二郎の“西田哲学を扱う場合陥りやすい陥穽は，独特な西田の用語に囚われ，それを使ってただ西田の論理をなぞるだけに終わることである。その弊を免れようとすれば，西田の論理を別のことばで捉えなおすことが必要であり，そのためにも自分の用語を鍛え上げねばならなかった”（『西田哲学の脱構築』[岩波書店，1987年]，127-128頁）に共鳴する。本稿が雑誌論考や多種の講演記録を援用するのも，このことと無縁ではない。

17 西田幾多郎石田憲次宛『全集』19，457頁。さらに，“御入用のものかとおもひ本日御返しいたします　今秋学会で御話しする前又一寸御貸し下さい”とつづく。

18 西田幾多郎小松攝郎宛（1934年9月9日付）「書簡集一」『全集』18，502頁参照。

19 拙稿「歴史の感覚をめぐって」をあわせ読まれたい。工藤・土居の論争についても，ここですでに触れた。

20 西田幾多郎「歌并詩」『続思索と体験』『全集』12，193頁。

21 西田幾多郎山本良吉宛「書簡集一」『全集』18，464-465頁。つづく記述にも注目。“私は今後私の力のつゞく限り自分で書くと共に周囲に優秀なる青年学徒を集めて　これ等と弁論討究してこれ等の人を少しでも思想的に陶冶したいと思ふ　万一それによつて思想上学術上何等か少しの結果を残すことを得ば我事足れりだ”と。

22 西田幾多郎「知識の客観性」『続思索と体験』『全集』12，161頁。なお，「西田幾多郎年譜」『全集』19，691頁によれば，同年，1932年6・7月，“二回にわたり「宗教・哲学・文化の諸問題について」の座談を『読売新聞』に掲載”とあるが，未見である。

23 西田幾多郎[要領筆記／文責在記者]「伝統主義について(3)—叡知的活動性—西田哲学とエリオットの思想」『大阪朝日新聞』（1934年12月6日），14面。

24 荒川龍彦「T. S. Eliotとその批評的立場（最近のEliot批評をめぐつて）」『英語青年』(June 1, 1933), 7.

25 Ed.『英語青年』72:7 (January 1, 1935), 245. この頃，編集責任者は福原麟太郎であった。向日堂主人については未詳。

26 R.F. [福原麟太郎]「英学雑記」『英語青年』72:7 (January 1, 1935), 246. 工藤の「三つの文学論」は，西脇順三郎を扱った「ヨーロッパ文学」『英語青年』70:11 (March 1, 1934), 364-366をⅠとして始まり，そのⅡ，「土居光知氏の文学論（上・下）」『英語青年』71:1 (April 1, 1934), 3-5；71: 2 (April 15, 1934), 39-41, および，そのⅢとしての，次注のエリオット論である。

27 工藤好美「T. S. Eliot論（上・下）」『英語青年』71: 5 (June 1, 1934), 147-148; 71:6 (June 15, 1934), 184-185.

28 土居光知「工藤氏の批評をよみて」『英語青年』71: 7 (July 1, 1934), 226. 以下の引用は227まで。

29 この年，1934年，西田の特別講演が行われた「日本英文学会第六回大会」では，エリオットの伝統論も言及された。「大会記事」(142)によれば，たとえば，田上元徳の「文学的伝統について」の要旨はこうである。

> 日本文学史上に於て批評精神を意識的に取入れたのは芭蕉であるとし，芭蕉の不易流行を解説し，不易流行は元来一つのもの，即ち俳句の血脈であるまこと，即ち格であることを絮説し，「不易に依つて批判され，流行に依つて転ずる，是即ち文学的伝統」と論じ，T. S. Eliotの伝統主義は「格に入つて格を出づる」といふ芭蕉の不易流行の説の蒸し返しに過ぎずと断じ，Eliotを去る二百余年前の芭蕉の芸術的人格を礼賛した。

この比較による伝統論がいかなる均衡を保ち得たかは不明である。

一方，森六郎は「Herbert Readと精神分析」で，“最近の *Form in Modern Poetry* の中でReadがT. S. Eliotの試みざりし個性の定義に関して精神分析的な説明を試みてゐることを説き，Eliotの近著 *Use of Poetry and Use of Criticism* [sic] 及び *After Strange Gods* を引用して近頃のReadとEliotとの意見の懸隔を指摘”(146)した。エリオットの変貌は，わが国でもいち早く採り上げられていたのである。言及された二冊の“近著”の出版は，前者は1933年11月，後者は1934年2月（イギリス版）および4月（アメリカ版）である。

30 鈴木成高の例は，拙稿「歴史の感覚をめぐって」245以下を参照。

31 西田幾多郎「知識の客観性」『全集』12，154頁。以下，引用文に頁をつける。

32 輪島士郎は，この「伝統」を読むと“日本英文学会でエリオットに即して語った伝統観がいよいよ西田の確信にまで深められた”ことが分かり，“そのかぎりでは，西田はエリオットの影響を受けたといえる”と言う（『T．S．エリオットの詩と真実』34頁）。その妥当性は別稿での大きな関心のひとつである。ただし，この小論文「伝統」が，彼の哲学が“ギリシヤ的な見る哲学であつて，皇国日本の随順の哲学でないといふ或批評者の言に答へたもの”（西田幾多郎[まえがき]「伝統」『全集』11，198頁）であることも見逃してはならない。

33 西田幾多郎石田憲次宛『全集』19，456頁。この書が『現代文学の諸傾向　評論』であることは，池谷敏忠が指摘するとおり。その「文化と伝統をめぐって―T．S．エリオットと西田幾多郎―」『比較文学論集』，73-87頁は，西田のエリオットへの言及のほぼ総てを網羅しており，問題の所在とともに，資料としても重要である。

34 「英語英文学の日本版エンサイクロペデイア」[広告文見出し]『英語青年』70:3 (May 1, 1933), 110-111. 非常時における日本文化への貢献を語る刊行趣旨は，記録

にとどめられるべきである。

我々のほとんど大部分は既に第二外国語として英語を習得してゐる，が然し現在の非常時に際してはたして幾何の効果があつたか。我々は今一応，各自の諸学力を顧る必要がある。本講座は英語と英文学全領域にわたつて，両者の密接なる関係を**基本的知識**に於て体系づけ，同時に個々の研究題目をあくまで純正周到なる**専門的蘊蓄**を傾けて編輯するところに第一の特色がある。

最高学府の秘められたる講壇を開放して一般社会人士の教養を向上し，独学者，学窓に在る若き人々の為に，また**最新の学説**研究の為に，忠実なる協力者たらんと期するのが特色の第二である。

編輯顧問の直接懇篤なる指導，全国の権威ある学者の熱誠なる参加，及び**必須研究項目のあますなき包含**，これらは特色の第三である。

とまれ，我々は微力を盡して本講座の十全を期するものであるが，更に一般江湖の同情と声援を得て日本文化の金字塔の一ならしめたく，切に大方の支持を冀ふ次第である。

35 さらに，佐藤清は「ティ・エス・エリオットの詩解釈」を『英語青年』の1933年4月1日号から7月15日号まで連載した。扱われた作品は，"Burbank with a Baedeker: Bleistein with a Cigar," "A Game of Chess," "Whispers of Immortality," "*The Boston Evening Transcript*," "Cousin Nancy," and "Mr. Apollinax." この佐藤の連載にも触れて，福原麟太郎は「わが文壇と英文学—英文学新講余談—」『英語青年』69: 3 (May 1, 1933), 5 に言う。"詩歌は恐らくむつかしいのだらうと思ふ。日本の詩壇なるものがすこし薄弱である。そしてこれが又左翼にあらずんば芸術派，民謡派などと分れてゐる。そこへT. S. Eliot の詩は余りに実際違ひすぎる。佐藤清氏が彼の作一つを評釈して本誌四頁半を費す程手間のかゝる詩風は，なかなか輸入されさうもない" と。

岩波世界文学講座の佐藤の『エリオット』は，のちに改訂され，1937年9月に，研究社から『T・S・エリオット詩・研究』として出版される。西田が後者を読んだことは確かだと思える。"研究社の新刊書中の　佐藤清著のT・S・エリオットの詩・研究を一冊神保町の御店に頼んで御送り下さいますまいか　二十九日までにほしいのですが"（1937年10月27日付岩波書店布川角左衛門宛『全集』18，626頁）を参照。なお，井上思外雄『ティー・エス・エリオットの「荒地」』を西田が読んだことは確実である。前注15を参照。

36 T. S. Eliot, *Homage to John Dryden: Three Essays on Poetry of the Seventeenth Century* (The Hogarth Press, 1924). Donald Gallup によれば，のち，1928年9月28日付アメリカ版，*The Hogarth Essays* に再録。発行部数は1,000。

37 George Williamson, *The Talent of T. S. Eliot* (Seattle: U of Washington Book Store, 1929: The Folcroft Press, 1970), p. [7]-8.

38 それぞれ，北村常夫「形而上学的詩人達」『詩と詩論』14（1931年12月），89-101;「形而上学的詩人」『エリオット文学論』（金星堂，1932年），61-82頁。

39 土居光知『文学形態論』[岩波講座世界文学第12回配本](岩波書店，1933年12月)。工藤の書評の対象は，他に『文学序説』（岩波書店，1932年2月）であった。

40 土居光知『英文学の感覚』（岩波書店，1935年9月），1頁。土居の言う“趣味”とは英語の“taste”の意であることに留意。以下，同書からの引用については，本文中にページを付す。

41 たとえば，

> 生活のリズムは今日急激な変化をなしつゝある。汽車，自動車，飛行機等は我々の移動の速度を十倍或は百倍にした。もし我々の移動の速さが肉体の力によつてなされる限りは，我々のリズム感覚もそれに伴つて早くなる筈であらうが，それが器械によつてなされる場合には，我我のリズム感は決してそれに伴ふことができない。我々が急行列車或は飛行機に乗つたとすると，非常に迅速な移行のリズム或は，左右の景色の急速な変化を経験するが，しかし我々の有機的なリズム感は到底これに応ずることができず，言葉のリズムを以つてしては容易にかゝる体験を表現することはできぬ。これを表はすには非常に急激に局面を変へつゝ変りゆく心象を以つてする他はない。(348-9)

土居は“未来派の絵画，建築及び特殊な文学形態”(344)をも念頭においているのである。上記につづく節も参照されたい。

42 土居の言う「機智」について，ジョンソンの否定的な見解を省略して引用すれば，こうである。それは，弁証法とは別のものである。このエヴリマン版の2巻テキストは，この頃，広く用いられたと想像される。

> [W] it. . . may be more rigorously and philosophically considered as a kind of *discordia concors*; a combination of dissimilar images, or discovery of occult resemblances in things apparently unlike. . . . The most heterogeneous ideas are yoked by violence together; nature and art are ransacked for illustrations, comparisons, and allusions; their learning instructs, and their subtlety surprises; . . . . (Samuel Johnson, *Lives of the English Poets*, Vol. 1, intro. L. Archer-Hind [Everyman's Library: J. M. Dent and Sons, 1925], pp. 11-2.)

43 荒川龍彦『T・S・エリオット』（不二出版社，1933年11月），78-79頁。以下，同書からの引用については，本文中にページを付す。

44 工藤好美「T. S. Eliot論(上)」，147を参照。“こゝで実践の問題を持ちだすのは私[工藤]自身の偏執によるのではなく，荒川氏自身がEliotに対する批評の中心的位置にこの問題を置いてゐるのである”と。

45 福原麟太郎「英文学新講(12)」『英語青年』70: 9 (February 1, 1934), 305.

46 福原麟太郎「英文学新講(14)」『英語青年』70: 11 (March 1, 1934), 364.

47 T. S. Eliot, "The Metaphysical Poets," *Selected Essays: 1917-1932* (Faber and Faber, 1932), p. 273. 西田はおそらくこの版で読んだのであろう。ちなみに,「英文学新講(14)」の,福原の訳ではこうである。

> テニソンやブラウニングは詩人である。彼らは考へる。然し彼らはその思想を薔薇の香の如く直接に感じない。ダンにとつて思想は経験であつた。それはその感受性に変化を与へた。(364)

48 [講演紹介]「伝統主義について(1)」。つづいて,『荒地』を念頭において,詩人は一般読者につぎのように紹介される。

> T・S・エリオットはアメリカ人ですが,1914年来ロンドンに住み「ニュー・クライテリオン誌」の主筆であり,その現実暴露のメタフィジックにおいて注目されてゐる詩人であります。

Synopsis

A Reading of Nishida Kitaro's Lecture, "On Traditionalism": In Its Context of the Understanding of T. S. Eliot in Pre-War Japan

Akira Nakai

On 25 November, 1934, Nishida, a leading philosopher of the time, gave a special lecture, "*Dento-shugi ni tsuite* (On Traditionalism)," at the 6th Conference of the English Society of Japan. He did not have a paper with him, and the lecture was given orally. Early the next month a detailed summary of it appeared in the *Osaka Asahi Newspaper*, without either acknowledgement or supervision by him. The standard text published in *Eibun-gaku Kenkyu (English Studies)*, May 1935, later included in the *Complete Works of Nishida Kitaro*, comprises two parts: a revised version of the lecture notes, taken and prepared by a young philosopher, and an additional comment by Nishida himself.

Nishida begins his lecture with his philosophical concern: how the world around us is constructed and becomes historical in terms of "perception." He then proceeds to T. S. Eliot's idea of tradition. As Ishida Kenji, who presumably arranged it and introduced him to the audience, remembers, the lecture was difficult to follow, while some young philosophers among them listened to him most attentively. Looking back on this occasion in the context of Nishida's stage of philosophical speculation, the lecture presents his idea of "*rekishi-teki jitsuzai no sekai* (the world of historical reality)," already embraced and to be developed further at a later stage. In another context of the understanding of Eliot at that time, Nishida was the only person who identified Eliot's

"historical sense" with "sense-perception," without any knowledge of Eliot's philosophical background. Quite casually he understood Eliot's historical sense, since his own philosophical system shared the theory of immediate experience as its premise.

The idea of tradition fascinated Nishida, and what he tried in the lecture was to make a connection with and to integrate it into his philosophical scheme. The result, however, is not necessarily easy for the readers of Eliot: his references to Eliot are often fresh and some of them suggest his original insights, but are confusing at the same time. Some fragmentary quotations from Eliot are forced together to make connection with his system of thought. Some irritate the readers, for they are apparently misread by Nishida but also seem convincing enough in the whole context of his argument. The method employed in this present reading of the lecture is to begin with the examination of each seemingly separate reference in the texts including the non-supervised version, and then, hopefully, to re-construct the idea of tradition as was understood by Nishida.

The uniqueness of Nishida's understanding of Eliot will be demonstrated in some detail from the perspective of the reception of Eliot in Pre-War days, the period around 1933 in particular, when Eliot studies as well as English studies were at their height. The flowering period also happened to be the period of gloom and turmoil advancing toward tragedy. Eliot studies, when they tackled the historical sense and the idea of tradition, could not be done without reflecting, directly or indirectly, on the general trend and sometimes government-oriented opinions of the day. When Marxist historicism had influence over the intellectual circle, its historical consciousness was one of the references to be considered. As Marxism was officially banned, there emerged another trend: Revivalism of Japanese tradition. Here again Eliot's

idea of tradition was given a different kind of frame of reference.

It must be made clear that the studies of Eliot in general were carried out with a detached critical mind. And yet, in the case of Eliot's historical sense, for example, the term was translated by almost all, except Nishida, as "*rekishiteki-ishiki* (historical consciousness)" and shared among the general readers of Eliot. The term, quite unconsciously of course, echoes the Hegel/Marx consciousness of history. Thus fixed, the original term "*rekishiteki kankaku* (sense)" would lose a connecting thread for Eliot's basic concern about "perception" : "Not only all knowledge, but all feeling, is in perception." As to the idea of tradition, many were forced to reflect some way or other on the difference between the European/Western tradition and the Japanese/Eastern, which was to become more acute, since the dichotomy also meant that of political concern in the late 1930s.

The present paper examines the text of the 1934 lecture along with a brief survey on Nishida's philosophical stance, followed by its contexts of Eliot studies and trends of thoughts of the period. Also examined are some readings of "The Metaphysical Poets" by Eliot scholars, since Nishida's unique reading of its familiar passage on the dissociation of sensibility holds the key to his lecture. This being an introduction, a close reading of the text will occur in another two separate papers to follow.